

ぎゅっと目をつぶると、

「……ご、ごめん！ トリス！ 着替えるから、ちよつと出て行ってくれないかな！」

しば絞り出すようにそう言ったのだ。

するとトリスは、

「あら。着替えのお手伝いをさせていただけこうかと思つていたのですが……」

そう口にしたが、本気で困っているウィルの様子を見てとって、

「ふふ。おお仰せのとおりにいたしますよ。では失礼します」
くちもと口許に含み笑いを忍ばせながら優雅にスカートを摘まんで一礼し、寢室から退出していく。

部屋の扉が閉められたのち、ウィルは不自然に盛り上がった毛布のふくらみを見下ろしていた。

「うう……これどうしよう」

毛布をめくると、そこにはピクピクと揺れながら天を衝く若い剛直があったのだ。

つづく